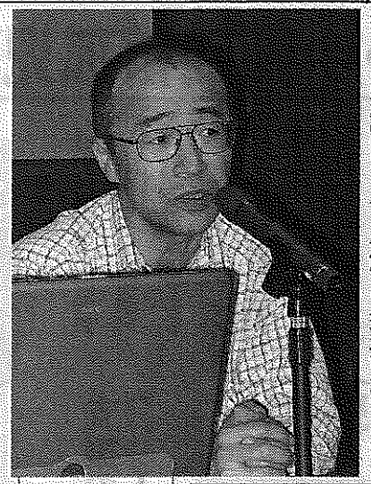
新聞 2007 1/29 神戸新聞 (第3種郵便物認可)

神戸・東灘で震災講演会

被災地で活動した医師・池田さん

「つながり」を大切



「震災が私にくれたもの」をテーマに語る池田さん＝神戸市東灘区、市立住之江公民館

阪神・淡路大震災を語り継ぐ講演会が二十八日、神戸市東灘区の市立住之江公民館で開かれた。十二年前、同公民館を拠点に医療ボランティアをした埼玉県在住の内科医池田正行さん(五〇)が、「つながり」をキーワードに、刻々と変化する状況のなかで情報を伝えあう大切さや、普段の交流の重要性などを訴えた。

池田さんは震災五日後に神戸入りし、全国から集まった看護師らと十日間、治療に当たった。二〇〇四年の新潟県中越地震でも現地でボランティアをしたという。

二つの現場の経験から「被災者のニーズと支援側との間に正しい情報のやりとりがないと、機能不全に陥る」と指摘。状況の変化が速いため、情報の管理をし、つなぎ役をするコーディネーターの必要性を強調した。

また、災害医療現場では、地域医療が日ごろから抱える課題が凝縮して現れるとし、備えとして地域外とのネットワークを普段から築き、バックアップ体制を整えておくべきだと述べた。

震災講演会は同公民館初の取り組みで、高齢者ら三十人が集まった。同館一階では、住民から寄せられた震災にかかわる写真五十五点も展示された。

(河合一成)

2007 1/29 毎日.

毎日新聞 (第3種郵便物認可)

「阪神」「中越」の被災者診療活動を語る

混乱の中、情報の大切さ痛感

東灘で 埼玉の内科医、池田さん

阪神大震災の直後、神戸市東灘区の住之江公民館を拠点に被災者の巡回診療にあたった内科医、池田正行さん(50)＝埼玉県在住＝の講演会「あれから12年…震災が私にくれたもの」が28日、同公民館であった。当時、診療を受けた地域住民ら約30人を前に、被災地の地図を広げながら、手探りで被災した患者を捜した経験を紹介。大震災から9年後の新潟県中越地震でも、混乱する被災地の交通事情を把握できず、支援活動の大きな妨げになったことから、「被災地の人は自分の生活で精いっぱい。国などが道路状況などを調べ、情報を提供してほしい」と訴えた。【岩嶋悟】

「人のつながりこそが大切」

被災地での情報共有の重要性を訴える池田正行さん＝神戸市東灘区の住之江公民館で

池田さんは「災害医療の現場に立ち会いたい」と、発生9日後の95年1月26日から6日間、家屋の倒壊などで甚大な被害が出た東灘区の避難所などを巡回。体調を崩した被災者への医療活動を行った。被災地では、全国から集まった医師と共に見慣れぬ東灘の地図を広げた。「道路状況や近所に寝た切り老人がいるのかといった情報を交換した」と話し、被災地で効果的に情報を集める重要性を指摘した。

巡回先では、寒さなどによるインフルエンザのまん延や、避難所生活でのストレスで睡眠不足になるといった被災地特有の問題点にも直面。かかりつけの医師の行方も分からず、患者への薬の処方にも苦慮したという。

04年10月の中越地震でも、同県小千谷市でボランティア活動を展開。9年前に比べインターネットなど情報手段の整備が進んだにもかかわらず、大震災時と同様、被災して混乱する交通状況が把握できず、道路の寸断で患者が待つ場所にたどり着けないこともあった。

池田さんは「道路を管理する国土交通省は被災地の道路状況をホームページに掲載していなかった」と、行政の対応に不備があったと指摘。その半面で、新潟でも知り合いの医師から道路情報を得たことから、被災地では「人のつながりによるネットワークが大切だ」と語った。